

M.S.ゴードン著

千の剣の破壊

——サーマッラーにおけるトルコ系軍人の歴史  
(ヒジュラ暦200~275年/西暦815~889年) ——

中野 さやか

本書は、M.S.ゴードン氏が1993年にコロンビア大学に提出した学位論文 *The Breaking of a Thousand Swords: A History of the Turkish Community of Samarra (218-264 A.H./833-877 C.E.)* をもとに、対象とする年代をさらに広げて、アッバース朝のトルコ系軍人を分析した新著である。現在マイアミ大学史学科で助教授として教鞭を執るゴードン氏は、これまでトルコ系軍人に関する論考を数多く発表しており<sup>(1)</sup>、本書はその研究成果の集大成である。

本書において著者は、アッバース朝のトルコ系軍団を社会政治史の枠組みのなかで論じ、その分析を通じて奴隷軍人が国家の統治機構に与える影響を明示しようと努めている。ここにいうトルコ系軍団の設立は、イスラーム史を特徴付けるマムルーク軍の創始であるとされることが多く、それと同時にイスラーム世界の従来の統治機構を覆す変動期の幕開けとしても位置づけられ、これまで多くの研究者がその重要性を指摘してきた<sup>(2)</sup>。著者はこれらの先行研究に依拠しつつも、軍団の内部構造と史料から判別できる個々の軍人を徹底して分析することにより、軍団とそれを取り巻くアッバース朝社会との相互関係を明らかにした。その上で彼は、本来イスラーム世界にとって異分子であったトルコ系軍人が、アッバース朝社会の一員となっていく経緯を解明し、アッバース朝の統治機構の変動に対する新たな視点を提示している。本書によって初期アッバース朝の社会政治史研究が新たな局面を迎えたことは間違いないであろう。

以下に、各章の内容を述べ、本書の概要を示す。

まず序章において著者は、トルコ系軍団を分析するにあたり、これを純然たる軍事機関としてではなく、アッバース朝社会の一員と見なす視点を示す。続いて軍団内部に存在した有力将軍と下級兵士というヒエラルキーを指摘し、この階級間の不均衡が9世紀中葉のアッバース朝社会政治史を読み解くうえ

で重要な鍵となることを示唆する。

第1章「初期段階」第1節「近衛隊の出現」ではカリフの親衛隊としてのトルコ系軍団の成立過程を概観する。ここで注目すべきは、軍団設立のためにアッバース朝政府が購入したトルコ系奴隷のなかに、中央アジアからイラクへ連れてこられた「草原の」トルコ人（The “steppe” Turks）と、家内奴隷としてすでにバグダードに存在した「バグダードの」トルコ人（The “Baghdadi” Turks）の2種類があったという指摘である。「バグダードの」トルコ人は、イラクに来て間もない「草原の」トルコ人に、カリフ親衛隊としての訓練を施すための人材として購入されたという。彼らはごく少数であったが、のちに「草原の」トルコ人とカリフとの間を取り次ぐ仲介役として台頭し、絶大な権力と富を独占する有力な将軍となった。この分析によって著者は、設立時点から軍団内には階級間対立の萌芽が存在し、それが軍団への編入経路に基づいていたことを論証したのである。

第2節「マームーン：権力の強化」ではアッバース朝7代目カリフ、マームーン（al-Ma'mūn, 在位813-833）がトルコ系軍団の設立に着手した政治的背景が述べられている。ホラーサーン総督であったマームーンは、異母兄弟である6代目カリフ、アミン（al-Amin, 在位809-813）を殺害し、新カリフとしてバグダードに入城した。しかしバグダードの王朝正規軍はアミンを支持していたため、自己の支配力を支える親衛隊の必要を感じたマームーンは、自分の勢力が及ぶ東方から、ターヒル朝やサーマーン朝を通じてトルコ系奴隷を購入し軍団の設立に着手した。

第2章「サーマッラーへの移住」第1節「ムウタシムとバグダードからの出発」では、836年に起こったサーマッラーへの遷都の背景に、バグダードでの王朝正規軍とトルコ系軍団の対立があったことが明示される。833年にはマームーンの兄弟であるアブー・イスハーク（Abū Ishāq）が、8代目カリフ、ムウタシム（al-Mu'tasim, 在位833-842）として即位した。アブー・イスハークはマームーンからトルコ系軍団の設立とその管理を委任されていた人物であり、この軍団の実質上の統轄者であった。彼の即位に対して、マームーンの息子であるアッバース（al-'Abbās）をカリフに推していた王朝正規軍が反発したが、実際には彼らの反発は、自らの地位を脅かす新たなカリフ親衛隊、すなわちトルコ系軍団に向けられたものであった。ムウタシムは、このトルコ系軍団と王朝正規軍との政治的対立を解決するため、トルコ系軍団を率いて836年にバグダードの北方に新たに築いたサーマッラーへ移動したのである。

第2節「サーマッラーへの定住」では、サーマッラー遷都後のトルコ系軍団の組織化について分析がなされている。ムウタシムはトルコ系奴隷を組

織化する過程で、「バグダードの」トルコ人を「草原の」トルコ人の指南役として重用した。ここで注目すべきは、「バグダードの」トルコ人にとって、カリフと「草原の」トルコ人の仲介者となることは、トルコ系軍団内に地歩を固める機会であったと同時に、カリフと個人的な関係を結び、政府内で大きな影響力をふるうための契機でもあったという点である。

第3章「サーマッラーにおける政治闘争」第1節「トルコ系指導部の影響力」では、サーマッラー遷都後に起こったトルコ系軍団と政府側との権力闘争が分析されている。軍隊として組織化されたトルコ系軍団は、バーバク (Babak) の乱など帝国各地の諸反乱を次々と鎮圧し、サーマッラーにおける一大勢力となっていった。その過程で「バグダードの」トルコ人は有力な将軍となり、政治に干渉するようになった。これに対するアッバース朝宮廷側の反発は激しく、10代目カリフ、ムタワッキル (al-Mutawakkil, 在位847-861) はトルコ系軍団の勢力を削ぐために、ペルシャ人やアラブ人などから成る新軍団を設立し、サーマッラーに代わる新首都をシリアに選ぶことさえした。しかしこうした強硬手段は、かえってトルコ系軍人らに反対勢力の排除を決意させることとなり、861年にムタワッキルは反対派のトルコ系軍人によって殺害された。

第2節「無秩序の開始」では、861年から870年までに及んだ軍団内部の権力闘争を分析し、軍団内部の対立がこの時期のアッバース朝社会の混乱の要因であったことを示している。861年にムタワッキルを殺害したトルコ系軍団は、以後、11代目カリフ、ムンタスィル (al-Muntaṣir, 在位861-862)、12代目カリフ、ムスタイン (al-Musta'in, 在位862-866)、13代目カリフ、ムウタツ (al-Mu'tazz, 在位866-869)、14代目カリフ、ムフタディー (al-Muhtadī, 在位869-870) を次々と傀儡化、または殺害していった。

このように表面的にはカリフを凌ぐ権力を手中にしたトルコ系軍団であったが、彼らは決して一枚岩ではなく、その内部には有力将軍どうしの派閥抗争と有力将軍に対する下級兵士の反発という二重の対立関係が存在した。この時期のアッバース朝は、大規模な軍隊を抱えていたことに加えて、有力将軍たちが富や権力を独占しようと抗争を繰り返して行政機構を混乱させたために、慢性的な財政難へと陥っていた。そのため給料支給が滞って困窮した下級兵士たちは有力将軍たちに対する不満を高めていた。このような有力将軍と下級兵士との対立は、865年にバグダードとサーマッラー間での内乱へと発展した。この内乱は、ムスタインを傀儡化し権力を独占していた有力将軍小ブガー (Bughā the younger) とワシーフ (Waṣīf) に対し、トルコ系下級兵士たちが不満を爆発させたことに端を発している。下級兵士たちの暴動を恐れた小ブガーとワシーフはバグダードへムスタインを移したが、

その間にサーマッラーのトルコ系軍人らはムウタツズを13代目カリフとして擁立し、バグダード側と争った。両者の抗争はアッバース家やバグダード市民などを巻き込み、帝国全土を混乱させたが、866年にバグダード側の敗北によって終結を迎えた。この内乱によって軍団内部の亀裂はさらに深まり、内乱終結後も有力將軍同士の派閥抗争と彼らに対する下級兵士の暴動は絶えることはなかった。

このように混沌とした状況にあつて14代目カリフ、ムフタディーは有力將軍たちから権力を取り戻すため、非トルコ系軍団を設立し、さらにはトルコ系下級兵士たちと手を結ぼうとした。しかしムフタディーが有力將軍であつたアブー・ナスル・ムハンマド (Abū Naṣr Muḥammad) とバーヤクバーク (Bāyākḅāk) を殺害すると、下級兵士たちはムフタディーから離反し、これによってムフタディーは廃位へと追い込まれた。ここで著者は、有力將軍と下級兵士間の対立が決して軍団内の普遍的な状況ではなく、個々の有力將軍の派閥には一部の下級兵士たちが組み込まれていたことを指摘し、それを彼らがムフタディーから離反した根拠としている。

第4章「権力の行使」第1節「影響力の源」では、トルコ系有力將軍が政權獲得のために用いた手段と自らの正当性を示すためのイデオロギーについて分析がなされている。

著者は彼らの政權獲得のための手段を以下のように区分する。

1) カリフとの関係。アッバース家と婚姻を結び、有力將軍が次期カリフである皇子たちの後見人となることによって、「子」であるカリフと「父」たる有力將軍という主従関係の転倒が起こつた。これによって彼らはカリフに対し強力な影響力を保てたとする。

2) 官職の利用。軍団内の有力將軍と下級兵士間の結びつきは、軍隊内のヒエラルキーによるものと個人的な関係によるものの二種類に大別され、そのうち個人的な関係が有力將軍の派閥を形成し、上述した有力將軍と一部の下級兵士間との特別な結びつきをなす。有力將軍たちはカリフから総督に任命されると、割り当てられた地域に派閥内の軍人を総督代理として派遣し、利益を分配することで派閥を維持していた。つまり下級兵士にとって有力將軍の派閥に参加するということは、権力を得ることを意味していたのである。

また派閥の維持には、支持者たちに官職を与えらるとともに、自分の収入を分配することも必要であり、有力將軍たちは自らの勢力を保つため、多大な出費を覚悟しなければいけなかった。ここで著者は、自らの派閥を有していた有力將軍たちによる財源の確保が、土地所有形態の変化を引き起こしたと論じている。トルコ系軍人たちの収入源は、私財、官職に就いた結果、利用できるようになったハラージュ、イクターからの収益の3種があり、このな

かで著者が最も重視するのが、イクターからの収益である。Cahen によると、この時期のトルコ系軍人の土地所有形態は、軍人に土地の管理と徴税権とを委任する軍事イクターの原型であった<sup>(3)</sup>。著者は、869年に行われたムフタディーと下級兵士間の交渉に関するタバリー (al-Ṭabarī) の記述から *iqṭā'* の単語を拾い出し、それに対し詳細な分析を加えることで Cahen の説を裏付けている。

また有力将軍たちは、自らをイスラーム共同体の一部として正当化するために、モスク建設やメッカ巡礼、「ジハード」としてのビザンツ遠征などを行い、イスラームへの献身を表明した。これに関し著者は、彼らがあくまで手段としてイスラームを用いただけであり、有力将軍であった大ブガー (Bughā the Elder) と彼の息子であるムーサー・イブン・ブガー (Mūsā ibn Bughā) 以外はイスラームに特別な関心を払わなかったと論じている。

第2節「トルコ系軍人の権力に対する反応」では、トルコ系軍人に対する同時代の人々の認識について、同時代史料や詩文から分析がなされている。ここで著者は、同時代人が有力将軍たちによるイスラームへの献身を表明する演出に対しては懐疑的であったものの、彼らを異端や社会のアウトサイダーとしてではなく、イスラーム共同体の一員でありながら規律を守らない者と見なしていたことを明確にする。当時の歴史的記述は、高い地位に就きながら略奪や不正を繰り返す者として、トルコ系有力将軍の行為を非難したものがほとんどであるが、大ブガーとムーサー・イブン・ブガーに関しては例外的に「王朝の守護者」であり「ムスリムとして敬虔なる者」であったと賞賛が与えられている。著者は、ムーサー・イブン・ブガーが巡礼路の安全を確保するために行ったヒジャーズへの遠征や「強大なカリフによる統治こそ安定と繁栄をもたらす」という大ブガーのカリフ論、4代目正統カリフ、アリーへの傾倒から、実際に彼ら親子が国家とイスラーム共同体の繁栄に大きく貢献したと判断している。

結論を示す最終章においては、15代目カリフ、ムウタミド (al-Mu'tamid, 在位870-892) の治世中に、アッバース朝政府がトルコ系軍団を巻き込みながら、帝国の統治を正常化させていく過程が分析されている。15代目カリフ、ムウタミドの即位 (870) は、非トルコ系軍団の支持を受けていたムフタディーの廃位を同時に意味し、トルコ系軍団が政府内の権力抗争に勝利したことを意味していた。しかしこの時点までに、権力闘争によってトルコ系有力将軍たちの多くは戦死し、また下級兵士たちはあまたの暴動をもってしても自らの経済的状況を改善できなかったことを自覚しており、サーマッターでの抗争は一応の静まりを見せていた。この時期のアッバース朝政府の実質的な支配者であったムウタミドの兄弟ムワッフアク (al-Muwaffaq) は、この機

会を逃さず、ムーサー・イブン・ブガーと信頼関係を築き、ザンジュ (Zanj) の乱やサッファール朝など、イラクへ攻め込んできた諸勢力の鎮圧と排除を開始した。サッファール朝やザンジュの反乱軍との戦いは熾烈を極め、この戦いに従事したトルコ系下級兵士たちの多くは戦死した。それに加えて、有力將軍たちのうち唯一生き残ったムーサー・イブン・ブガーがアッバース家へ服従し、進んで国家体制の正常化に努めたことによって、アッバース朝政府の支配はようやく正常に復したとされる。

以上が本書の概要である。本書の特色は、トルコ系軍団をマムルーク軍の萌芽的在り方として扱う先行研究が多いなかで、あえて時代を815年から889年と限定し、徹底して軍団内部の実態の解明に努めたところにある。特に、バグダードで購入されたトルコ系奴隷が、カリフと中央アジア出身のトルコ系奴隷との仲介役として台頭し、有力化していったことや、有力將軍たちがアッバース家との婚姻関係や経済力を利用して自らの勢力基盤を保っていたことなどは、本書が初めて明らかにしたことである。とりわけアッバース朝社会のなかでトルコ系軍人がどのように他者と関わり、また認識されていたかという第4章の分析こそは、アッバース朝の社会政治史研究のなかで独自の貢献を示している箇所である。

一方、9世紀のアッバース朝社会を分析するうえで重要な人物であるムーサー・イブン・ブガーを、たぶんに典型的に分析している第4章第2節から結論部分に関しては、論の展開にいささかの無理があると言えよう。著者は、トルコ系軍団内部の権力抗争を勝ち抜いたムーサー・イブン・ブガーを「アッバース家に忠実なムスリム」と見なし、これを本来イスラーム世界では異分子であったトルコ系軍人が、イスラーム共同体へ定着したモデルとしている。しかしムーサー・イブン・ブガーがムタワッキル殺害に関与していることに関しては何の説明もせず、また876年に彼が反乱軍の侵攻を恐れてファールスの総督位を返上した事件を<sup>(4)</sup>、アッバース家への忠誠ゆえの謙讓と見なすなど (p. 145)、ムーサー・イブン・ブガーに対する著者の解釈はかなり強引なところが目立つ。

実際にはムーサー・イブン・ブガーは、巡礼路の確保のために長期の遠征を行い、ムワフファクと協力し統治機構の正常化に努めた一方で、ムタワッキル殺害や反乱鎮圧の任務の放棄なども行っていた。彼のこのような行動は、ムワフファクが、父親であるムタワッキルと敵対したムーサー・イブン・ブガーと信頼関係を築き、諸反乱の鎮圧に努めたこととも通じる。このような彼らの行動に関しては、政局が混乱していた状況にあって、政権掌握の機会を窺いながら臨機応変に行動していたことが、一見すると一貫性に欠けた行動をとらせたという解釈がより適切と言えよう。つまりムーサー・イブン・

ブガーの一見矛盾している行動に対し、著者が詳細な分析を行ってれば、それを通じて9世紀後半のアッバース朝政府における個々人の在り方の一端をさらに明らかにできたのではないだろうか。

以上、第4章第2節から結論部分に関して若干の批判を述べたが、いずれにせよ本書の眼目はサーマッラーにおけるトルコ系軍団の実態の解明にあり、著者がそれに関する重要な視点と分析を提供していることには変わりはない。前述したように、この軍団の設立はイスラーム史を特徴付ける軍事制度の開始と見なされることが多く、さらに従来の統治機構を覆す軍事イクター制度への転換でもあったとされている。よって本書はイスラーム世界の軍事制度と初期イスラーム史の社会政治史に関する研究を行う者にとって、自らの研究を深めるきわめて有用な文献であると言ってよいだろう。

## 註

(1) 著者がこれまでに発表したトルコ系軍人に関する論文は以下の通りである。

“Forming an Imperial Elite: The Commanders of the Samarran Turkish Military,” C.F. Robinson (ed.), *Multidisciplinary Approaches to Samarra: A Ninth-Century Islamic City*, Oxford (2000); “The Khaqanid Families of the Early ‘Abbasid Period,” *Journal of the American Oriental Society*, Forthcoming; “The Samarran Turkish Community in the Ta’rikh of al-Ṭabari,” H. Kennedy (ed.), *Al-Ṭabari: A Medieval Muslim Historian and His Work*, Princeton, Forthcoming; “The Turkish Officers of Samarra: Revenue and the Exercise of Authority,” *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 42:4 (1999), pp. 466-493.

(2) 例えば、余部福三「マームーンとムータスィムの新軍団」『史林』66-6 (1983)、63-108頁、佐藤次高『マムルーク——異教の世界から来たイスラームの支配者たち』東京大学出版会 (1991)、42-74頁、嶋田襄平『初期イスラーム国家の研究』中央大学出版部 (1996)、345-451頁、清水和裕「9世紀アッバース朝のアトラークと奴隷軍人」『史学雑誌』99-6 (1990)、1-37頁、同「マムルークとグラーム」『岩波講座世界歴史10 イスラーム世界の発展』岩波書店 (1999)、223-245頁。欧文論文では、D. Ayalon, “The Military Reforms of Caliph al-Mu‘tašim: Their Background and Consequences,” *Islam and the Abode of War*, Vermont (1994), pp. 1-39; id., “Preliminary Remarks on the Mamlūk Military Institution in Islam,” V. J. Perry and M. E. Yapp (eds.), *War, Technology and*

*Society in the Middle East*, London (1975), pp. 44-58; C. Beckwith, "Aspects of the Early History of the Central Asian Guard Corps in Islam," *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 4 (1984), pp. 29-43; P. Crone, *Slave on Horses: The Evolution of the Islamic Policy*, Cambridge (1980), pp. 80-81; O. Ismail, "Mu'taṣim and the Turks," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 29 (1966), pp. 12-24; H. Kennedy, *The Prophet and the Age of the Caliphates: The Islamic Near East from the Sixth to the Eleventh Century*, London (1986), pp. 158-178; D. Pipes, "Turks in Early Muslim Service," *Journal of Turkish Studies* 2 (1978), pp. 85-96; M. A. Shaban, *Islamic History: a New Interpretation*, Vol. 2, Cambridge (1976), pp. 62-68.

- (3) Cahen, Cl., "L'évolution de l'iqṭā' du IXe au XIIIesiècle: contribution à une histoire comparée des sociétés médiévales," *Annals: Économies, Sociétés, Civilisations* 8 (1953), pp. 25-52.
- (4) Ṭabarī, *Ta'rikh al-rusul wa'l-mulūk*, V. Rosen and M. J. de Goeje (eds.), Leiden, 1964, series III, p. 1888.

Matthew S. Gordon, *The Breaking of a Thousand Swords: A History of the Turkish Military of Samarra (A.H. 200-275/815-889 C.E.)*, Albany, 2001, 303p.+20p. (acknowledgements, maps), A5.